



線上のエンガワ — 駅住まいのための中間領域 —

茨城大学工学部都市システム工学科 鶴志人

0 1. 鉄道と無人化

かつて地方駅は、交通の拠点であると同時に、鉄道員が常駐する生活の場でもあった。しかし自動化と無人化が進み、人の気配は薄れ、駅は「まちの顔」から単なる通過点へと変わりつつある。さらにモータリゼーションの進展により利用者は減少し、駅の存在意義も問い直されている。こうした状況のなかで駅には再び人が滞在し関わる「暮らしの場」としての役割が求められている。

0 2. 海浜鉄道と阿字ヶ浦駅の記憶と風景

茨城県ひたちなか市の勝田駅～阿字ヶ浦駅間を結ぶひたちなか海浜鉄道湊線。終点の阿字ヶ浦駅は、かつては全国有数の海水浴場として栄えた「阿字ヶ浦海水浴場」の最寄り駅である。1980年代には、年間300万人もの海水浴客が訪れ、辺りには多数の旅館が立ち並び、多くの海水浴客が利用した。

しかしその後モータリゼーションの進行と共に利用者は減少し、一時は廃線の危機となる。現在は第三セクター化され、列車増発や新駅設置などの利便性向上により利用者は回復傾向にあるが、阿字ヶ浦駅をはじめとした湊線ほぼすべての駅が無人化している。また、国営ひたち海浜公園西口付近への約3.1kmの延伸計画がある。実現すると阿字ヶ浦駅は終着駅から中間駅となり、様々な変化が起これと考えられる。

0 3. テーマ：駅に集合住宅をまとう

地方を中心の増加した無人駅は、かつて鉄道員が常駐していた時代とは異なり、人の気配を失い、地域との接点を薄れさせながら通過点となっている。

本提案では、そうした駅に集合住宅をまとうことを試みる。

駅そのものに住まいを接続することで、暮らしの場と交通の拠点を重ね合わせ、かつてのように駅に人がいる風景を、現代の住まいのかたちとして再構築する。誰かが暮らす駅には、その人の気配や生活の表情が滲み出る。日常の断片が車窓を通して垣間見え、駅と地域、移動する人とのあいだに新たな繋がりが生まれる。

駅は単なる通過点から、地域の表情を映し出し、緩やかに滞在する場所へと転換していく。「駅に住む」という行為が視線や動線、アクティビティを通して、まちと駅に新たな関係性をもたらす。駅と住宅、移動と滞在、公共と私的領域の間の関係を顕在化させることで、地域における駅の役割を再編成していくことを目指す提案である。



0 4. コンセプト：中間の領域「エンガワ」がホームとまちを緩やかに重ねる

阿字ヶ浦は太平洋に面し、まち全体が海と人の中間の領域として作られている。海の家のような、人と海を繋ぐまちである。かつて賑わいを持っていたころの阿字ヶ浦駅も海水浴場への玄関口として、更衣室や売店などの機能を持ち、海へといざなわれる中間的な場所であったが、現在はその面影は失われている。

本提案では駅に集合住宅をまわらせるうえで、プラットホームとまちのあいだ、駅と海、住人と利用者、公的領域と私的領域といったあらゆるモノコトの境界に柔らかく重なり合う多層的な中間の領域「エンガワ」を作る。

0 6. ランドスケープ

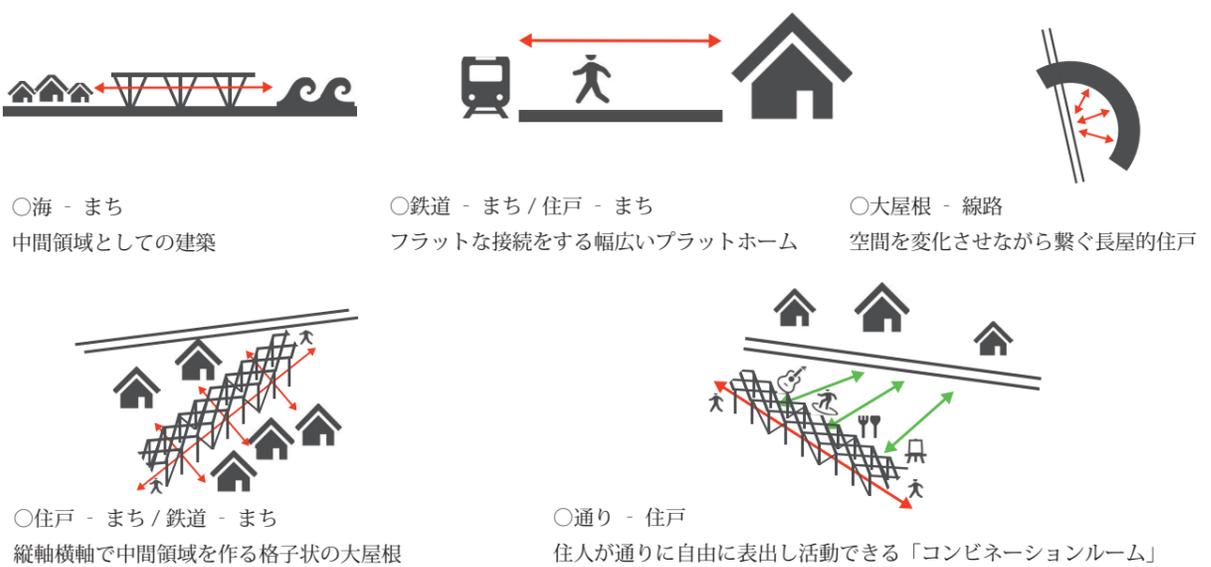
海に面し、高台にある阿字ヶ浦駅は、周囲を森に囲われている。現在の阿字ヶ浦駅では海を見ることはできないが、海に面するデッキによって展望が可能となる。

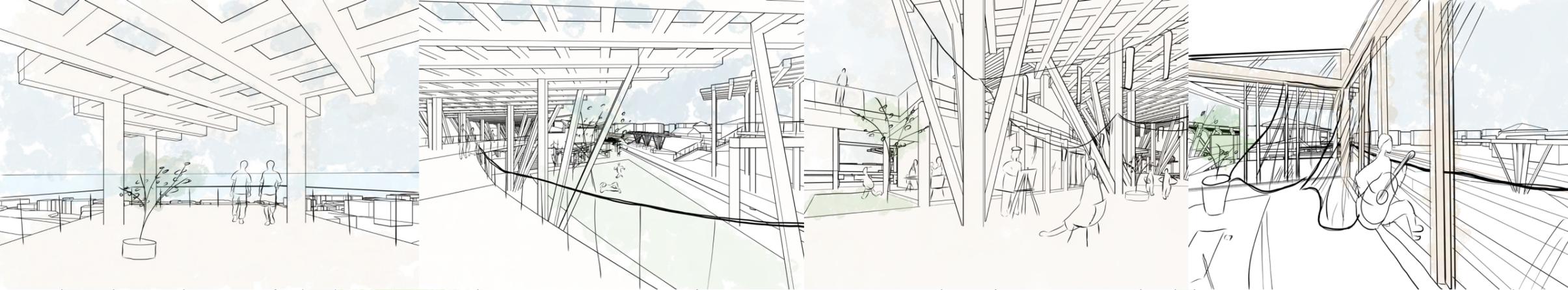
周辺環境になじむボリュームで、駅から海へ向かう曲線、線路の東西を結ぶ曲線、地形に沿う曲線を組み合わせた形の3つの屋根を構成する。

中間の領域「エンガワ」は、ホームとまちの境を曖昧にし、生活と移動、公共と私的をつなぐ緩やかな場となる。住まいからにじみ出る人の営みが駅空間やまちに滲み込み、駅の風景に暮らしの気配を呼び戻す。

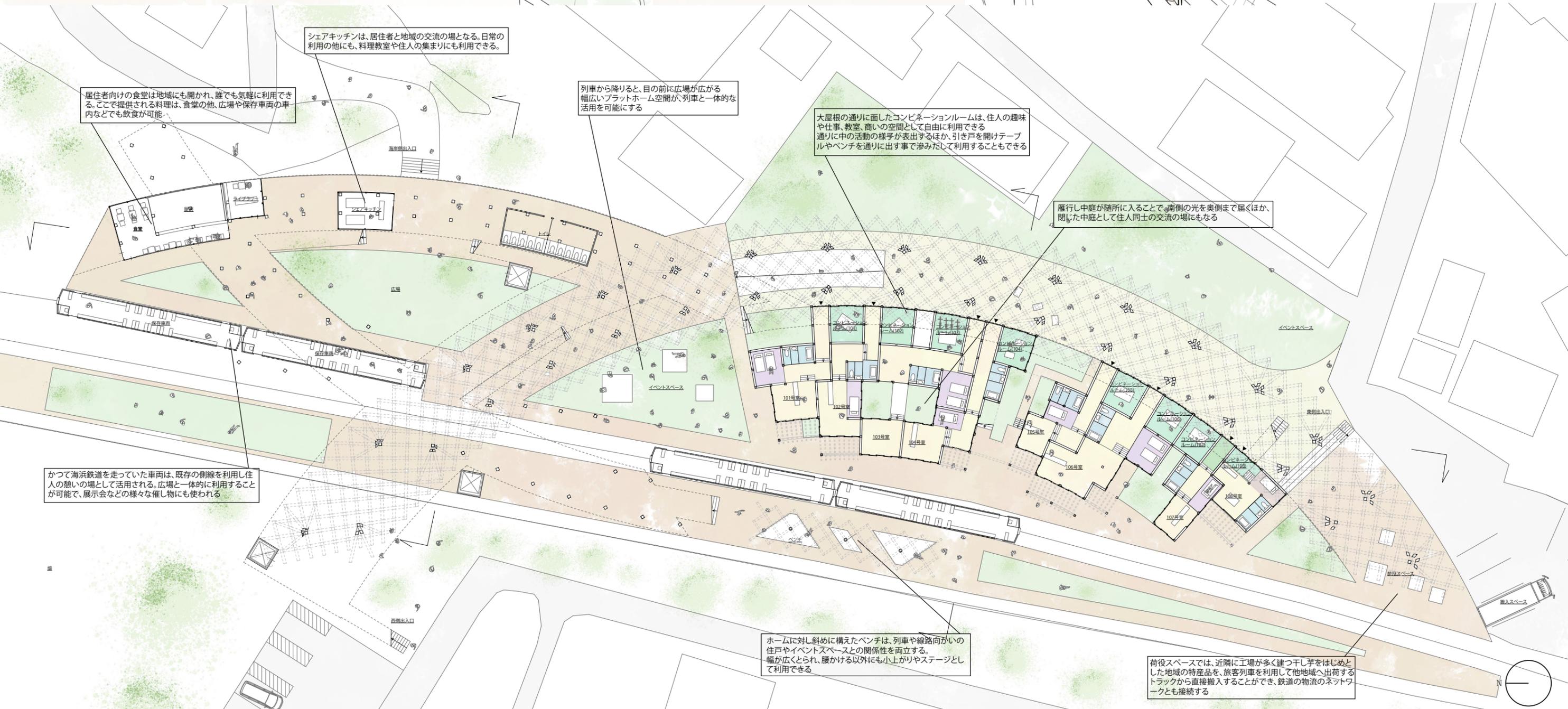


0 5. エンガワ - あらゆるモノコトの中間の領域が顕在化するプログラム -





□基本情報
 所在地：茨城県ひたちなか市
 用途地域：第一種住居地域
 主要用途：鉄道駅、集合住宅
 敷地面積：7300㎡
 建築面積：2778㎡
 延床面積：4492㎡（1階：2778㎡、2階：1714㎡）
 建蔽率：38%（許容：50%）
 容積率：62%（許容：100%）
 戸数：13戸
 階数：2階
 構造：S造一部木造（大屋根、コンコース部）
 木造（住戸部）



シェアキッチンは、居住者と地域の交流の場となる。日常の利用の他にも、料理教室や住人の集まりにも利用できる。

居住者向けの食堂は地域にも開かれ、誰でも気軽に利用できる。ここで提供される料理は、食堂の他、広場や保存車両の車内などでも飲食が可能。

列車から降りると、目の前に広場が広がる。幅広いプラットフォーム空間が、列車と一体的な活用を可能にする。

大屋根の通りに面したコンビネーションルームは、住人の趣味や仕事、教室、商いの空間として自由に利用できる。通りに中の活動の様子が表出するほか、引き戸を開けテーブルやベンチを通りに出す事で参みだして利用することもできる。

雁行し中庭が随所に入ることによって、南側の光を奥側まで届くほか、閉じた中庭として住人同士の交流の場にもなる。

かつて海浜鉄道を走っていた車両は、既存の側線を利用住人の憩いの場として活用される。広場と一体的に利用することが可能で、展示会などの様々な催し物にも使われる。

ホームに対し斜めに構えたベンチは、列車や線路向かいの住戸やイベントスペースとの関係性を両立する。幅が広くとられ、腰かける以外にも小上がりやステージとして利用できる。

荷役スペースでは、近隣に工場が多く建つ千手をはじめとした地域の特産品を、旅客列車を利用して他地域へ出荷するトラックから直接搬入することができ、鉄道の物流のネットワークとも接続する。

一階平面図 S: 1/400



立面図 S: 1/400



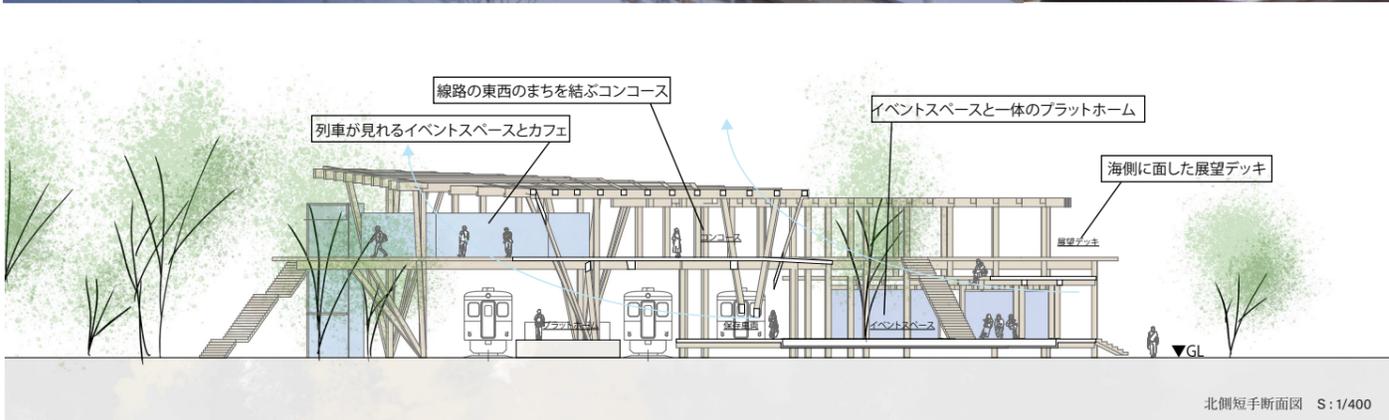
大屋根を背景に一体的な空間のプラットフォームと住戸



保存車両を取り囲むように配置されるデッキやコンコース

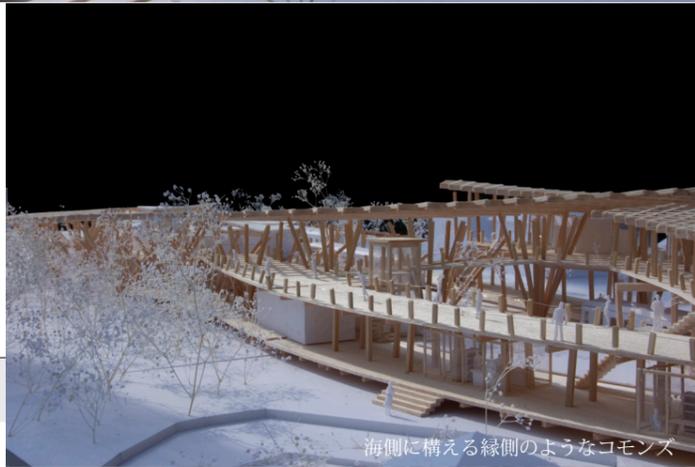


格子の大屋根が取り囲む住戸とプラットフォーム

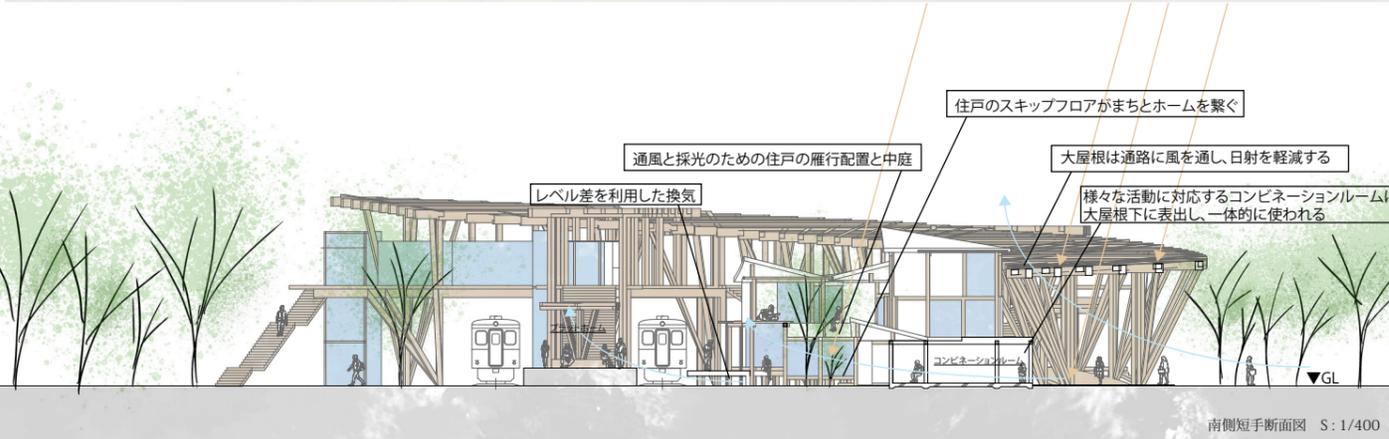


北側短手断面図 S: 1/400

線路の東西のまちを結ぶコンコース
 イベントスペースと一体のプラットフォーム
 列車が見えるイベントスペースとカフェ
 イベントスペース
 海側に面した展望デッキ

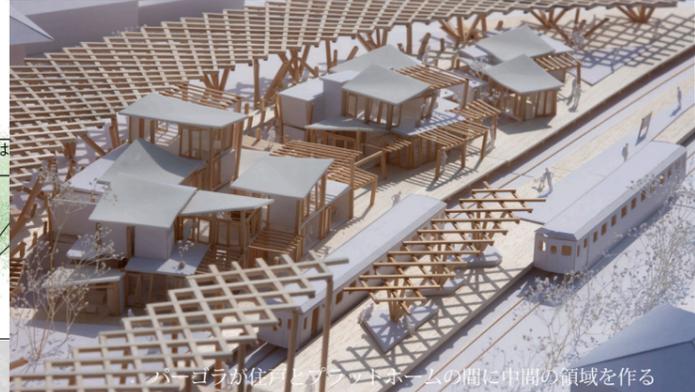


海側に構える緑側のような commons

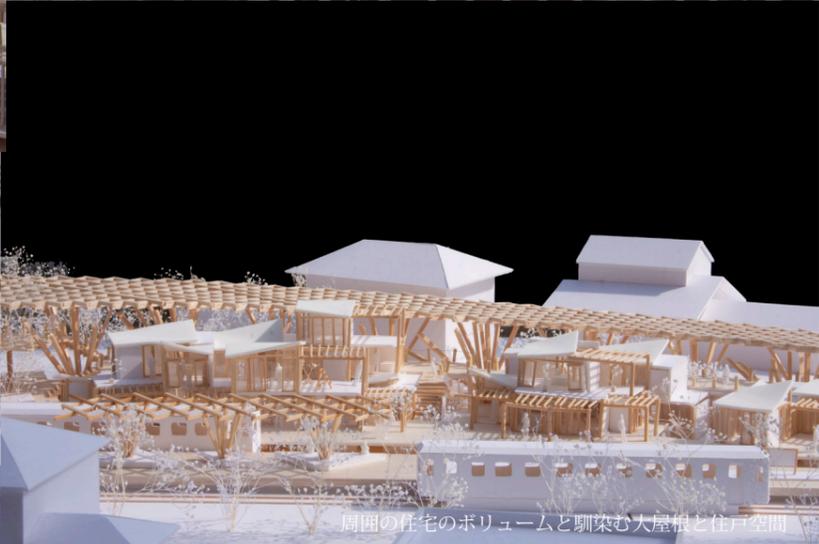


南側短手断面図 S: 1/400

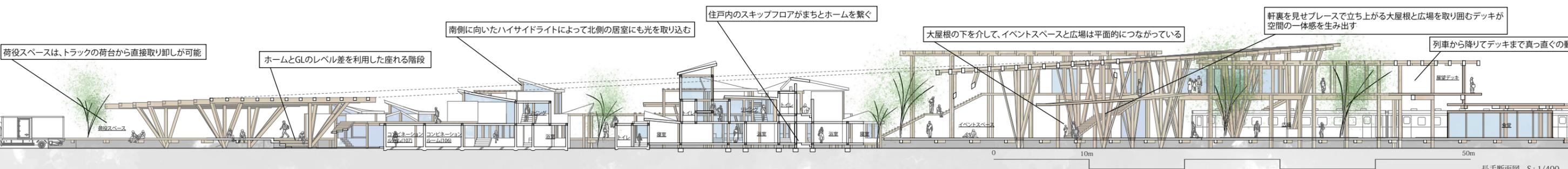
住戸のスキップフロアがまちとホームを繋ぐ
 大屋根は通路に風を通し、日射を軽減する
 様々な活動に対応するコンビネーションルームは
 大屋根下に表出し、一体的に使われる
 通風と採光のための住戸の雁行配置と中庭
 レベル差を利用した換気



パーゴラが住戸とプラットフォームの間に中間の領域を作る



周囲の住宅のボリュームと馴染む大屋根と住戸空間



長手断面図 S: 1/400

荷役スペースは、トラックの荷台から直接取り卸しが可能
 ホームとGLのレベル差を利用した座れる階段
 南側に向けたハイサイドライトによって北側の居室にも光を取り込む
 住戸内のスキップフロアがまちとホームを繋ぐ
 大屋根の下を介して、イベントスペースと広場は平面的につながっている
 軒裏を見せプレースで立ち上がる大屋根と広場を取り囲むデッキが空間の一体感を生み出す
 列車から降りてデッキまで真っ直ぐの動線